

人間福祉学における「プロセス哲学」の意味と可能性Part III : 福祉学上の方途的意味と展開可能性の軸芯を探る

著者	牛津 信忠
雑誌名	聖学院大学論叢
巻	30
号	2
ページ	111-135
発行年	2018-02
URL	http://doi.org/10.15052/00003323

人間福祉学における「プロセス哲学」の意味と可能性 Part III ——福祉学上の方途的意味と展開可能性の軸芯を探る——

牛 津 信 忠

抄 録

精神性の要に志向性を位置づけ、それを論理の軸芯に据えることにより、量子論に基づく科学的志向が、単なる「機械論的論理」へと落ち込むことから離脱できる。さらに全体としての総合的作用動態たる宇宙的世界への開きのもとで、一（いち）存立体としての統合性の継続を可能にする確実な営みを考察する。このような継続的営みにおける個としての存立への対応特性に注目して、それを対人福祉の営みとして重視する。このような作動の精神的核として、ホワイトヘッドはキリストの説いたままの「愛」を指し示している。愛の高揚のプロセスは、把握された事実を越えていく志向性の歩みとして理解される。それは、一たる存在の存立それ自身を支える条件設定によって可能になっていく。この条件が人間福祉施策、活動、技術等である。プロセス哲学は、こうした福祉展開を総合的に意味づけてくれる。

キーワード：現実的実在、両極性、両立性、位相論、プロセス哲学

Part III 第九章 現象学的位相論はプロセス哲学に適合するか

第1節 福祉的現実と位相論による内実解明

第2節 人格論と量子論を結ぶ両極性の理解

第十章 人間福祉学的人格論的考察の軸芯となるプロセス哲学

第1節 人格論的人間福祉学とプロセス哲学

第2節 プロセス哲学における宗教思想の位置

結章 （人間）福祉学のプロセス哲学的展開可能性

第九章 現象学的位相論はプロセス哲学に適合するか

第1節 福祉的現実と位相論による内実解明

福祉領域を究明するためには、客体化できる世界から客体化できない領域までを総合的に、過去・現在・未来にわたって含み込んで考察することが求められる。この希求性に添って見ていくと、メルロ＝ポンティのいう位相的視点が極めて重要である。われわれは、人間存在と人間世界の営みの持続内で、想定においては変形があるとしても、変わらない本質性向を持ち、状況変容があろうとも連続している位相的本質性向を見出していくことができる。ここでわれわれは、連続を可とする、いうならば同相をもたらし軸芯を再度確認しておかねばならない。それは同相態を連続させている内容そのものであり、そこにあるのは作用としての内実である。その内実を存立可とするのが志向性(ないし指向性)⁽¹⁾と不可視ながらも在るべくしてある総合的存立の要としての「統合性」である。志向性までは、メルロ＝ポンティが明確に捉えるところであるが、統合性については、同時に前提にすることが容易ではない。ただ前方にあるとして想念されるのみとしかいえないのである。しかし、その統合性があることによって志向性による総合が形作られ一定段階の成就への道が可能性を帯びてくる。それは志向と統合の相互包摂という表現を用いることのできる総合状況である。

われわれの世界における存立体は、その原点領域において「分枝」としてあり、それはメルロ＝ポンティの言葉を用いると「肉の存在」、「生(なま)の存在」という存在性ということになるが、それないしそれらは志向性に内在する結合性によって「共現前」という情況のなかに包摂される。あるいは志向性によって共現前という包摂のなかで「分枝」という存立が与えられるともいえる。これはまさに相互包摂の連鎖のなかで各分枝の原点にある結合的志向の内実が「共現前」化していくプロセスであるということができよう⁽²⁾。われわれは、これに加えて、志向の前方に統合性という結合の原点をも見出そうとするのである。それは相互包摂という形で志向性のなかに内在するとともに始原において前方にあるものでもある。

われわれはこうした考察を基礎にして、福祉的現実とプロセス哲学との融合性を問うさらなる究明の歩を踏み出すことにする。

ところでホワイトヘッドのいう「現実的実在」は意識との関連性をもって捉えられているかに見えるが、それは意識そのものではなくむしろ経験によって取り出される存在ないし存在性である。彼に添って意識と経験について問うと、経験は意識作用を伴う、そこには絶えず志向性が意識の核として作用している。量子論に還元して「現実的実在」との関連のもとに位置づけられる意識作用であっても、その作用を伴いながら結果へと導かれていく前後において経験を形成していく作用形態の全体においては、単なる唯物論的量子運動には還元できない意味形成的意識作用が内在している。一(いち)としての意味づけを獲得する以前と以後においては、確率的運動の連鎖のなかにあっ

て、意味的量子運動（作用的には意識としての量子運動）が介在すると考えられる。かくして第Ⅱ部において述べてきた意味形成作用としての志向性が、そのプロセスにおいて一たる存在の意味づけの内容を確実化させながら作用化の動態を進行させていく。ホワイトヘッドは、物理学における「単純な物的感じの時空的ならびに量的性格」の究明可能性について量子論を核として次のような説述に至る。「現実的実在」は、こうした「感じの結合体において結び合わされる」。「近代物理学者たちは、エネルギーが一定の量子において転移されるのを目撃する」。さらに「この量子論と神経学の近年の業績に類似性がある」ことを指摘する。続けていわく、「疲労は蓄積の表現である。それは物理的記憶である。さらに因果性と物理的記憶は同じ根から生じる」。「両方とも物理的知覚である」。彼は、こうした議論の展開のなかで、「原子論、連続性、因果性、記憶、知覚、エネルギーの質と量の諸形式、延長」について、それらを明確な考察の対象にして、有機体の究極的な振動的性格を明らかにしてゆき、「自然における『潜在的』要素」の究明をなすことの必要性を説くのである⁽³⁾。それにより「現実的実在」としての一が形作られ、次の一としての存立への受け渡し、意味のないし価値高揚を伴った作用化がなされていくことを示そうとする。

ホワイトヘッドの量子論的解明による意識の解き明かしは、経験という総合的作用の流れを裏面ないし不可視的世界の視野拡大をなす位相論的形態を持っており、メビウスの輪や見えない紙の裏面の世界というように連続していることをわれわれに告げ知らせる役割を果たしてくれる。この連続性のもとで、われわれは、位相論のなかにあるユークリッド幾何学の世界をもう一度議論の遡上に引き戻すこともできる。あるいは位相幾何学の連続世界をユークリッド幾何学の諸原理を有効に活用しながら前に進めることもできるのである。両者の対立構造を越えて、意味的結合性を持った量子運動ないし作用が経験則を新たに蓄積しながら結果的な統合化の道を進んでゆく。その動的態様は志向性と統合性の連続として把握することもできる。

このように思考を進めていくと、現象学、特に、ホワイトヘッドの論（プロセス哲学）と関連を指摘できるメルロ＝ポンティの位相論に関わる議論は、意味形成的営みを注視する限りにおいて、相互補完的な関係にあるとすることができる。

われわれは、他稿において位相論の可能性を究明して、その集合論における意味的関係性について言及した。それはユークリッド空間からの飛翔的展開に見えて、実はホワイトヘッドが肯定するユークリッド空間についての議論にいう思索の積み重ねに添って、その連続性を抽出する見方を変えた展開ともいえる。特にわれわれが下記に註記している近年における「場の量子論」はわれわれの主張を堅固化する可能性を持つ。「多くの分野において広がりをもって位相的考察の応用領域が拡大している。特に「位相的場の理論あるいは位相不変量を計算する場の量子論」は注目に値する。⁽⁴⁾われわれは、このような動向把握の立場に添って、さらに量子論的考察における連続性論の軸芯となる両極性の議論に立脚しつつ、福祉における人格論との近接領域に視点を当てて思索を深めてゆ

きたい。議論を先取りして概括すると、両極の両立性により、われわれが目で捉えることができるすなわち容易に対象化しうる領域と対象化をなし得ない領域が同時に存立する連続性が見えてくる。

ここにおいてはホワイトヘッドのいう「現実的實在」の量子論上の意味が最重要視される。対象化可能な自我としての人間の側面と対象化できない人格主体としての側面を当てはめて捉えると、ここに両者における一方の自我性他方の主体としての人格性が共存立することの福祉上の見解を伴った論理的成立が意味ないし価値を媒介にして可能になる道を把握できる⁽⁵⁾。

第2節 人格論と量子論を結ぶ両極性の理解

ここで、前述の議論を踏まえつつ、ホワイトヘッドの理解による量子論を位相的場の理論を基底づける量子論に近接させて、延長量子という観点から見ることにする。「量子においては、時間的要素と同様に、空間的要素がある。こうして、量子は延長領域である」とされる。すなわち解題的に述べると、「延長性という特性を持って捉えられるこの領域は、合成が前提にしている決定された基底である」。「この基底は、新しい合成にとって可能である現実世界の客体化を、差配している」。このような「発生的過程……を支配している主体的統一性は、主体的指向の原初相とともに生起する延長量子」を「全体として現実化」していくのである。ここにいう量子は、ホワイトヘッドにより究極的に捉えられるように「神から原生的に派生する主体的指向に調和している延長の連続体におけるその立脚点である」⁽⁶⁾。このように延長領域が示されるのである。ホワイトヘッドは、延長性をこのように延長の究極たる宗教的世界すなわち神の領域にまで拡大し、統合性と全体性をその論のなかで貫徹させていこうとするのである。

この立脚点の有り様についてホワイトヘッドは三つの関連状況を引いて解説を加えている。まず、各現実的實在が生じる現実世界が第一の立脚点と考えられている。第二に多くの中間的現実体を包含することになる「媒質」としての現実世界が立脚点となるというどこまでも延長可能な状況世界がある。最後に、選択肢が、新たな合成の基底として選択される延長内での特殊な量子に関する未決断によって表象される状況、それが偶然性のもとにおかれるという、そのような立脚点がある。ホワイトヘッドは、このような立脚点の位置づけのもとに、それぞれの核としての存立を可とする上述した神について解題していこうとするのである。こうした議論のなかにおいて、神は、「それによってこそ物理〔法則〕があるような世界における現実態である」と、現実態の現実態としての究極的實在としての神が説かれるのである。

かくして、われわれは現象学的位相論が、量子論の介在を経て、あるいは量子論の極微的世界にまで思索を深めることによってプロセス哲学そのものの持つ本質思索へ到ることができると結論づけることができる。すなわち現実態と究極性、対象化可能領域とその不可能領域、両者の存在にお

ける両極性の統合が、究極における神の存在によって現実存在に与えられ、可能になっていく、とすることができるであろう。そこにある統合性こそが人格主体の志向性の方向として、絶えずそこに与えられている作用そのものである。

これを矛盾的同一性として捉える（例えば心身の間にある種の統合関係を想定して両者を結びつけたものとして捉える等）のではなく、ボーム（Bohm, Davit）流の「内蔵秩序」の存在から捉える考え方に立つ方が人格の統合性論に関していう場合には適合性を持つのではないかと、とする論も多く賛同を得ている。相互に包み込み合うことを許容する秩序の存在そのものが在る、と理解する思想もそれなりの妥当性を持つ。ボームも認めているがホワイトヘッドの「現実的機会」の概念はボームの概念に近いとされる。しかしボームが「内蔵秩序をもちいて瞬間の性質や関係を表現する」のに対し、「ホワイトヘッドはこれをやや異なった仕方で行っている」⁽⁷⁾。ボームとの対比検討は一考に値するが、ここでは、ボームの内蔵秩序論が、より完結性の高い全体性の把握であるのに対し、ホワイトヘッドの論は、人間世界の側から一を積み重ねながら、志向性のもとに神を望み歩みゆく。ホワイトヘッドは人間世界は神の包摂性のなかに在るとして、その両者が全体のなかに包摂されているという理解（結果的相互包摂）ないし表現を採っている。この理解をわれわれは採り上げ、未完のなかの現実性という開かれた論に立脚しながら議論を進めてゆくことにする。さすれば、われわれが捉えた両極性を、未完のなかの全体的存立という意味に添いつつ、やはり両極保持における全体表現として矛盾的同一性という位置づけのもとに論を先に進めていくべきであろう。

このようにして、現実態としての神が究極の統合性として人格論的にもそれを可とする現実作用たる究極の志向性の極としてそこに描かれうるという両極性、さらにそれが矛盾的同一性という作用態の状況として捉えられるとしても、両極間の浮動のなかにあってそこに志向性の軸芯を形作ってゆく限りにおいて、延長と連続が与えられていくという理解にわれわれは到達していくことができるのである。

しかしこの段階でもう一度プロセス哲学にいう現実的實在の内実における意味連関について最終的な確認をしておくことが必要である。現実的實在が量子の域における存立体であるとしてその量子領域に意味をもたらす、ないし意味を形作る相互連関性が、どのようなインパクトのもとに可能となり、それが志向性を形成し、さらにそれが持続していくのか、ということが、さらに詳細に解明されてゆかねばならない。そのことが上記の思索を深めるなかで議論の詰めとして人格論的考察に即してなされていく必要がある。それを次章で究明していき、さらに福祉論のなかで受け止めながら結章へと至ることにしよう。それは、これまでの人格論的論述を踏まえて、現実事象が展開していく要と考えてきた福祉的方向性への歩みを究明していくことに繋がる。その議論は換言すると形而上学としての人間論ないし人格論をプロセス哲学の成立根拠である現実的實在の論を通じて福祉事象の現実として確実性のなかに浮き彫りにしていくことになる。

第十章 人間福祉学の人格論的考察の軸心となるプロセス哲学

第1節 人格論的人間福祉学とプロセス哲学

この章において、われわれは再び人格論に立ち戻り考察の連続性を再考察してゆくことにする。ユークリッド空間における自我的限界は、上述の考察を経て、位相論さらに量子論の内実解明的論理を連続ないし継続の現実的核心としながら見えない世界を現実的実在として明らかにしていくという展開をたどることになる。そこには人格としての統合性を作用として可能にする作用動態が現実態として存立している。その人格の統合性への飽くなき志向継続は、人間存在が進化の過程で勝ち得た能力ということもできようし、前方の作用態様を信じることによる能力の高揚として把握することもできよう。われわれが見える範囲で明確さを持って知りうるのはこの志向性という現作用態様の存在のみであるが、しかし、量子論的には、見えないけれども存在する現実的実在ないし実質と呼ばれうる存在として両立しながら存立する態様が確実にあるということがいえるのである。この作用核の極微にある「現実的実在」をホワイトヘッドは、その内実に現実という物質世界とともに、信仰世界を伴うという表現をも可としうる精神作用として同時的に見出している。その両者が両極的に相互的存立していることをこの「現実的実在」という言葉によって統括的に表現している。

ところで前述のように、彼のプロセス哲学は、「あること」から「成ること」への連続性を基軸論として示すものでもあるが、この成ることのなかには、それを可能にする志向性が内在的に存立しているのはいうまでもないことである。その個々のなかにある志向性が一（いち）への動きを支え、さらにその作動そのものがあるが故に一たる存在が維持されうるという意味においてその一（いち）たる存立体の統合性における現状の要をなす。また志向性は統合性の高揚への道に在るという意味において継続の前提となる作用でもある。その志向性とは、人間意識のなかにおいて、行為動態を支える意味ないし価値として感得されるものである。

このことに関連して、ホワイトヘッドのいう「二つの純粋な様態間の相互的関連づけ」ないし「相互作用」における「象徴的関連づけ」とそこにおける「意味」の観念について触れておきたい⁽⁸⁾。象徴的関連づけのためには、第一に「共通の根拠」が必須である。なぜなら前提される「経験にはそれぞれの純粋な知覚様態において同一なものとして直に認知される構成要素」が必要とされるからである。この共通の根拠を持ちながら、経験はより高次の相へと移行していく。ある相からの移行は、二つの様態の抱握と合生的統一が、例えば初期創始相と後期創始相がそこに形作られていく道程において生じていく。それを際立たせてみると象徴的関連づけをするにあたり解釈的であることから間違いが生じるという状況存在がその原因となることに気づく。ホワイトヘッドはこの間違いを注視する。そうして「間違いはより高次の有機体の徴表であり、向上的深化をうながす教師で

ある」とする。そこに「知性の深化的効用」が発祥すると主張するのである。さらに次のようにいう。「因果的な効力を持った先立つ現実的諸契機の直接的知覚」において「知覚者はそれ自身のパースペクティブの制限のもとで現在化された場所がその重要な諸領域において受けている因果的影響を抱握する」。その現在化された場所は、諸感覚所与によって直接例示される。他方、因果的過去、因果的未来、そして他のさまざまな同時的出来事は、現在化された場所との延長的諸関係によって、間接的にのみ知覚される。さらに「象徴的関連づけの根拠は、二つの知覚様態の両方の構成要素となっている永遠的客体の同一性によって惹起される」「両者間の結合」である。さらなる根拠は、「多様な永遠的客体があるとき、直接的知覚と総合のそのような諸段階を通じての延長領域の同一性」といった様態上の性格を持つものであった。これによって可能になる多様な領域への移行が生じる、とするのである⁽⁹⁾。

さらにわれわれは、知覚が意識状況内でたどりうる４段階についてのホワイトヘッドの議論へと進んでいくことにしよう。彼は現実世界において相互に峻別しえない４段階の現実的契機を指摘する。第１段階は「現実化された持続」が与件内で無視しうる要素である現実的契機であると仮定する。これについては「静止ならびに運動の可知的定義は不可能」とされる。第２段階は、「現在化された持続」が与件の重要な基本要素である現実的契機である。しかし人間経験がより低次の場合という条件内の契機であるとされる。第３段階は、現示的直接性がある高められた精密さを持ち、「象徴的転移」が「現在化された持続」を重要なものへと高揚させている段階の契機である。第４の段階では、「自由な概念的機能」が道を与えられ、「経験は、想像力の享受と判断との接合された働き」によって、重要な再組織が図られる。こうして人間における想像力や判断が経験に伴って発揮され、そこから自由な概念の機能発揚がなされ、それはまさに意味形成、さらに価値に裏打ちされた行為になって発現されていく。その行為は、創始的な価値志向から延長・拡大しながら連続していくことになるのである⁽¹⁰⁾。

この営みのなかで、前述したような「全ての事物はベクトルである」ということが現実的に明らかになる。すなわち、すべては有機体としての存在性を志向的延長として多様な作用形態を持って存立しているのである。

クラウドス、エリザベス、M. は、この延長しながら連続していくホワイトヘッドによるプロセス理解を次のような図式的理解で総括的に表現しようとする。これについては下記の引用によって理解を導き出す手がかりとしておきたい⁽¹¹⁾。ここにおいては、過去のプロセスすべてを初期データとして実態把握し、それが経験的諸事（出来事）による書き換えを伴いながら移行していく。さらにその歩みが、決定的な実態移動を経て充足へと到達していく。これは、図のなかでは等角的な対応局面から、そこに多くが付加されていく局面への移動としてとらえられ、その内実としては、当初の初期データにおける否定的要素の削除を通じて統合化されていくプロセスへの進行があり、それは、感情反復の局面として捉えられている。また、さらにそれに付加的プロセスが連続していき、

それは概念を伴う感性段階として捉えられる。それは審美的付加性と知的付加性に区分される。前者は主観的形態を伴う審美的側面とされ、後者はより複雑に対応する感情についての対象的、命題的、物理的目的の局面：認知的かつ想起的感性、直感的、意識的認知および派生的判断を可とするとされる。

われわれは、こうしたクラウドの理解によるホワイトヘッドのプロセスの内側を網羅的に説述することを目途とするのではなく、その内なる連続性の動向の核心のみを捉えて深めてゆく。そこにある延長性の内実たる連続性や継続性は意識化された意味ないし価値に支えられ、それは量子的な次元にまで細分化し把握することができる有機体として世界の全体、宇宙的次元にまで広がりを持った全存在のうちに抱握されつつある存立へと至りながら一が次なる一へと高次元化を伴いつつさらなる継続へと至る。

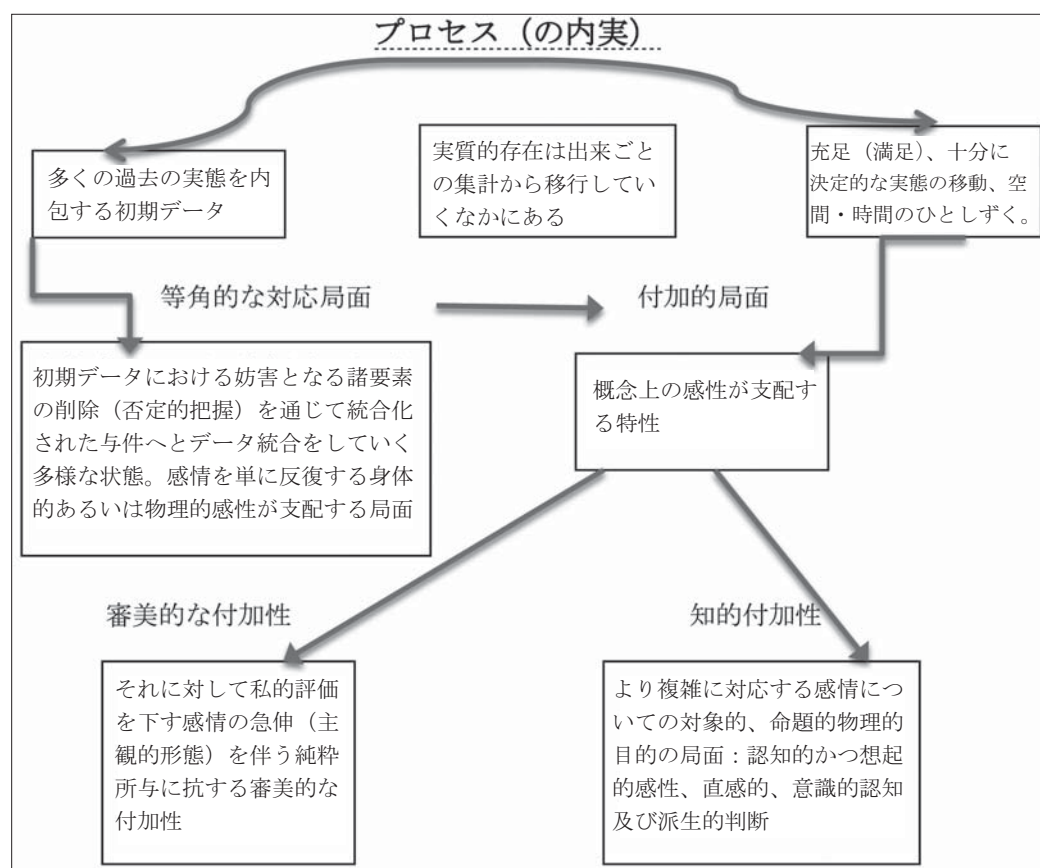


Figure 3, by Kraus, Elizabeth M., in “The Metaphysics of Experience”.⁽¹²⁾

そのような経緯をたどる上記の図に示されるプロセスにおいては、それが客体化されることによって歴史という名の過去が形成されてゆくことになるが、そのような歴史として各様の形態を伴

いつつそれそのものとして時の流れとそれに連続する空間のなかに一たる存立が刻まれていくことになる。

その内容解明については、ホワイトヘッドの「延長論」にいう「現実的實在」の「充足（満足）」ということに関わり、それを構成する「感じ」の区分について触れることを必要とする。彼はここに「発生的区分」と「整序的区分」という充足（満足）プロセスにおける状況概念を導入する。「発生的様態においては、諸抱握は相互的な発生的関係のうちに示される」。現実的實在はプロセスのなかにあり「そこには、相から相への成長がある。統合と再統合の過程がある」。ホワイトヘッドはこれを「発生的移動」として捉え、これは、「物理的時間のうちにあるのではない。……物理的時間は、多様に分かれた成長の有様、すなわちその断片」を示している、とする。現実的實在の充足（満足）とはこのような構成過程にあるのではなく、「最終的な完結した感じが『充足（満足）』」であるとして、彼はその方向性を示すのである。さらに「相」が成長していくにあたっての「発生的プロセスの各相は、量子まるごとを前提する。」として、この「量子においては、時間的要素とともに空間的要素がある」という。このようにして、前にも述べたように「量子は延長的領域」として位置づけられる。続いて「充足（満足）の整序的区分性は、この領域の可分性との関係において考えられた充足（満足）（訳書原文の（満足）という訳語を上記のものを含めここでは充足とした）である」。すなわち「充足（満足）」の性格内にはこのまるごとの量子領域の可分的性格が反映されている。そこには「あるかもしれない」区分が「感じ」として領域内在的に存在しているという可能性が前提されるのである。「延長的量子」は、こうした区分的潜在性の下に在ると理解される⁽¹³⁾。

上記されてきた「整序性」と「発生」についての論は、ホワイトヘッドにおいては公共性と私性の議論へと展開されていく。「公共的事実は本性上、整序的」である。また「事物の私性」と「現実的實在」とは、「自己享受の発生の要素」としての「主体」であり、「目的論的な自己創造」の要素的存立体となる⁽¹⁴⁾。

ホワイトヘッドは「現実態を分析しうる唯一の具体的事実は抱握である」という。この抱握が公的側面と私的側面を内包している、とする。さらに「諸抱握の整序性は、私的発生からの抽象において考察される限りでの世界の公共性を」顕現させる、とするのである⁽¹⁵⁾。

「整序的区分」における結びつきにおいて「延長性の形態論的構図」が重要視される。こうして「過去の世界に成立をしてきた充足（満足）の様態の存立」が可とされ、またそれによって「特定の秩序が存立」し、かくして「具体的諸契機」となり、またそれらが契機として分割されていく諸抱握の個々の実体によって、「特殊化された秩序づけ」がなされてゆき、その態様の連続が延長的連続体を形作っていくと理解されるのである⁽¹⁶⁾。

こうしたホワイトヘッドの議論は、宇宙論ともいえる極大の延長的結合の論へと広がってゆく。量子論を核とする現代物理学の考察がそれを可能にし、それが上述してきた論の内実における理念性の論理的趨勢によって、唯物論化することなくその展開は宗教性にまで拡大を見せることになる。

われわれは、このことについて人格論の要にホワイトヘッドの宗教思想にいう「愛」を位置づけながらそこにおける統合性の究極の在り方を探求しつつ、それと福祉論の持つ志向性の本質動態とを関連づけていく作業を進めていく。

第2節 プロセス哲学における宗教思想の位置

上述してきたような動態的性格を内在させるプロセスを、福祉思想に添いながら明確にしていくためには、その思索の志向性の先端領域において宗教に触れながらも、それを、福祉的現実の人間存在の把握可能な状況たる自我主体の側から科学との関連のもとに分析していくことが必須となる。われわれはこの段階で科学と宗教の相補性に関する議論に言及しておかねばならない。これまでの議論のなかで対比的に取り扱ってきた科学、特に現代物理学上の量子論と哲学、科学哲学という方が適切であろうが、その両者が必然的に結びつく在り方を問うことから始める。われわれの視点からするとそれは科学と哲学の相補性に基礎づけられる論となる。科学における目に見える展開から、さらなる展開をたどっていくと、最先端におけるその宗教性へ至るプロセスを解き明かすことから逃れることができない。われわれは、そこに至る思索の流れを探るが、哲学的ないし宗教哲学的考察を交えながら議論を進めていくことにしたい。前に参照した山本誠作がホワイトヘッドの思想の核心に見出している「科学的にものを知ること」すなわち「科学的知識といえども、如上の意味合いにおいて、宗教的信と密接な相補的關係のうちにある」とする見解に同意する。この発言は、科学が「それ自身自律するものではない」ということ、「宗教を前提にし、宗教と相補的關係に立つ」ことを提示し、確信へ導こうとするものである⁽¹⁷⁾。この見解に考察を加える作業を試みてゆこう。

ホワイトヘッドは、「宗教は人間そのものと、事物の本性の永遠的なものとに依存する限り、人間の内的生活の技術であり理論」であり、その「内的生活は現実存在の自己実現である」⁽¹⁸⁾と宗教について総括的ともいえる思想の提示をするのであるが、その言葉の表面だけをみる限りにおいては、宗教が物象のなかにある科学に飲み込まれ、生きる技術に墮してしまったかのような印象を拭えない。しかし彼の宗教観は、物象的世界の分析に終始する単なる物質合理性の所産としてのそれではない。彼のいう宗教とは「合理的宗教」という表現においても理解しうるように、科学と宗教が密接な相補性を持つと同時に、むしろ相補性を越えゆく有機的一体性を保持すると理解できる側面を強固に持っている。それは理性信仰に陥ることのない永遠を前提にした無限への足がかりとしての、その意味でそこには永遠への志向性そのものを位置づける神の姿が存在する。そうした宗教と科学が、全体性を捉えることのできる宗教と、未完のままながら目的性を持ち志向をなし続ける科学としてのそれぞれの特性を保持して存立する。ホワイトヘッドは、そこにいう「合理的宗教」を「それを人生の一貫した秩序の中での革新的要素とするという目的をもって、その信仰と儀式とが再組織された宗教」⁽¹⁹⁾と表現しており、まさにそこでは、上記方向性をたどる内的生活に対する

関わり方を示す必然の流れ、としての理解がなされている。

山本は、この「宗教と科学との相補的關係を可能とする」立場をとるホワイトヘッドの思索の根幹に「人間を含めてすべての事物の経験の最小の単位を有機体として捉えようとする物質観、世界観」を見出している⁽²⁰⁾。

山本は、この「事物の最小単位」としての有機体を「現実的實在」とするホワイトヘッドの見解に従い、その「究極的な實在物」を「無機物から植物、動物、人間さては神に至るまで、すべてのものの経験は一元的に現実的実質（注 前述したようにわれわれはこの語（actual entity）を『現実的實在』と訳している。以下同様）から成っている」と理解するのである。さらに「人間を含めてすべての事物の最小の構成物を一元論的に現実的実質（實在）なる概念でとらえることによって、人間経験の特質を研究する精神科学……と、物質の運動とか構造などを研究する自然科学との相補的關係を可能にする道が開かれてくる。」⁽²¹⁾これはともすれば誤解を招きかねないと思われるが、しかし、いわゆる「機械論的自然観」とは全く異なる立場である。この「機械論的自然観」という視座はホワイトヘッドが「科学的唯物論」として否定する立場に他ならない。この立場からは、精神を伴って在る具体的な現実妥当な把握が不可能となる。したがって現実的實在は捉えることができない⁽²²⁾。「現実的實在」は「環境の世界によって限定されながら、自らを限定することによって、そこに新しさを創り出してくる自己創造的被造物である」と相互限定的に創造という方向性を内在させていると本質における把握がなされている。そこには宗教を内包する精神科学と物質運動を研究する自然科学との相補性なくしては理解することができない関係状況がある。その状況においては限定されながら限定する、創造物でありながら被造物であるという両極的な融合性ととともに、それが同時的に可能になることによって全体的な作用動向が具体として存在する。それは表層の動向として完結性を持つのではなく、作用状況のなかでプロセスとしてプロセス動向の連続としてのみ存立するという、その継続を方向づける性格性を維持し続ける。そこにはその態様特性を作用させる主体の存立がある。また「経験の主体でありながら、主体が常に自己超越体と結びついて捉えられる」。それは個的には目で見て捉えがたく、全体としてのエネルギーの流れとして捉えることによってそれを具体として想念することができるのみである。個的に把握不可能といってもその作用が全体として把握される以上、個的にも作用の軸心としての個的作用性向は捉えうるであろう。その個的存立体は現実的實在と呼称されるのであるが、これは「自らの実現」と「一から他への移行の連続」としてその性向を把握できる。これは「エネルギーの流れに認められる粒子性と波動性に対応する」とされる。ホワイトヘッドは「現代物理学におけるこの二つの現象の相補性」によって、そこに根拠を置いて理論展開をしているとみることができる⁽²³⁾。そうしてその関係性のなかで「現実的實在」が「その環境の世界によって限定されながら、ある目的の実現を目指して、自らを創造していく」という「媒介的契機」としての存立論が提起されることになる⁽²⁴⁾。

そこにはホワイトヘッドの宗教思想が密接に関わっている。ここでは福祉思想とその目的性のも

とにある技術領域に視点を当て論の展開を具体の流れに添って試みているのみであるので、宗教との関連に主軸を置いて深く問うことはしない。完全な一致点はないものの、われわれの論の基本は宗教思想においてもホワイトヘッドのそれと共通する諸点を持つことだけを確認していくことにする。詳しくはホワイトヘッドの宗教論についての見解、「宗教とその形式」、および「過程と実在」における宗教論を参照されたい⁽²⁵⁾。ここではかなり簡略化した形にはなるが、彼のいう「神」ないし神の概念について触れておくことにする。それが彼の論においてはプロセスの結節点についての永続する究極の重要性を持っているからである。

ホワイトヘッドは、神は、「あり得ないものが、それでもそこにあるという、この不可得の事実をわれわれが理解する仕方である」⁽²⁶⁾と表現している。その「神」について「原初的本性」と「結果的本性」を見出し、前者は概念的であり、後者は意識的であるとする。原初的本性は、「概念的経験によって構成され、原初的事実としてある」。さらに結果的本性を、「時間的世界から派生した物的経験とともに生じ、そこから原初的側面との統合を獲得する」としている。その理解は「神の物的感じを神の原初的本性に織り込んでゆく」⁽²⁷⁾。またそれは「個体的な自己実現を伴った要素の諸多性から成っている。それは統一性であると同じく諸多性であり、自らを超え出るたゆみなき前進であると同じく、一つの直接的事実である」⁽²⁸⁾。かくして「神の最終的完結性ゆえの不変と、神の派生的本性による創造的前進が結果的に在る。神の本性はかく両極的である」⁽²⁹⁾。「神は始原的であり、終末である」。神が始原的であるのは、神が「創造的働きと生成の一致にある」からである⁽³⁰⁾。さらに、彼は、このような結果的本性は各様の「合成しつつある契機へのその関連の度合いに応じて、時間的世界に併行していく」とする。それは「四つの創造相」として示される。それぞれ「無限な概念的創始性の相」、「物的創始性の時間の相」、「完成された現実態の相」、「創造の働きが完結される相」として提示される。この最後の相が「神の世界に対する愛である」とされる⁽³¹⁾。このように描かれる各相のプロセスにおいて、「神」は、その存在によって「物理的『法則』」が成立するといえる「世界における現実態」であるとして捉えられるのである⁽³²⁾。

このようにいうホワイトヘッドにとっての神とは、まさに前方への道を現在また確実に過去にまで遡って在る作用力として存立する総合的全体であるとともに、個々のすべてのなかに存在する実在そのものであるといえる。現実態様は現在から見ると創造性の未完としてしかあり得ないかに見えるが、絶えず前方に開かれるという仕方の継続において、すなわち開かれた志向性としてのその作用力の存立が確実にある。それは現実的実在の自己実現への道であり、将来的に見れば創始的様態そのものがそこにあることが明白となるからである。そうした意味合いにおいて、「神は世界における機能である」というホワイトヘッドの見解によってわれわれに内容理解が与えられる。「神は機能である」、そして「これによって、われわれの意識において、偏することのない諸目的に向けられる」方向がたどられる、という、そのような「機能である」⁽³³⁾。ところで、ここに「機能」とされる表現については、われわれは、注26に明記する論拠によって、「作用」ないし「作用力」

として理解している。

さらに「われわれの意図」が「われわれ自身のための諸価値を越えて他の人のための価値へと拡大する。また他の人のための価値の獲得がわれわれのための価値へと変容する」。このような「世界における結合の要素」として神が価値的世界の創造の要として捉えられている。この存在によって「自然的に浪費しつつある」「宇宙」が「他方では」「精神的には上昇していく」ことを可能にする、と理解される⁽³⁴⁾。換言すると、自然的には浪費の流れであるとししか見えない機能の連鎖であったとしても、その連鎖が形作る世界には精神的上昇が存立していき、そこに神の意図、意志の存在を察知し、把握することが可能である。その「神の意図」とは、ホワイトヘッドの言葉によると、「時間的世界の中で価値を維持する積極的目的の未来における価値調整を目指す現在の調整」に他ならない。また彼は、「現実性そのものに内属している価値とは、自己関心——すなわち自己価値の——情感のなかにある。他の諸事物の価値は、この究極的自己関心に貢献する要素であることから生じる派生的なものである」と、述べるのである⁽³⁵⁾。すなわち神の積極的意図は、人間の営みにおいてはあくまでも現在の調整としてしか感得できないものの、実際にはプロセスのなかで未来に照らした評価としてしか姿を現すことがない。しかしそこには確実に神が作用として存在し、「これによってわれわれの意識において、偏することのない諸目的」への道が辿られることになる⁽³⁶⁾。かくして精神の核としての志向性の要に働きかけ続ける原要素としての神がここに示されていると解することができる。

ここでわれわれがこの論において主眼とする人格論を想起しよう。われわれは、人格について、それが人格主体と呼ぶことのできる段階にまで高揚したときには、目で見て捉えることができない、すなわち物化的対象化できないと理解してきた。これは統合性を持つ作用的高揚を経て、いうなれば統合作用としてのみ把握可能である。こうした主体としての人格は、シェーラーを用いていうと、個的人格、(社会的)総人格、さらに宗教的次元に達する秘奥人格として高揚の道程が描かれるとされる。この人格主体の議論は、過去の現実から現実の今を軸にして考えていくと、過去からの志向性たる現実の連鎖が、「突如として前方の神の光に照らされるという二元性の矛盾に晒されてしまうことになる」と、その二元論的表層に対しては多くの研究者が指摘をしてきたところであった。これを矛盾とすることなく、有機的な連続性のもとに捉えうる議論をわれわれは各様の形でこれまで展開してきた。ホワイトヘッドの哲学(ないし宗教哲学)は、その矛盾とも見える志向を包摂していく神と世界、特に人間世界の科学的な有り様をわれわれの目の前に展開してくれるのである。ハーツホーン、チャールズはその著において、ホワイトヘッドは神を「現実的存在(an actuality)」と表現し、新たに現実的存在が総合されてゆき「それぞれの新しい存在が、これまでの『多』に対し自己を付加し、それが永遠に続く。」としている⁽³⁷⁾。そうして、このような神を、「一人格ないし一つの個体に類比される」として理解しようとする。このような理解の前提として、ハーツホーンは、ホワイトヘッドの思想をベースにした「相対論」をもって言説を展開している。そこ

においては、相対主義に集約されることなく、「相対的なものと非相対的なもの」との「両者の合一」状態が考えられている。いわく、「両者の合一状態は、諸関係を含んでいなければならない。部分的には、その諸関係により構成される。したがって相対性こそが根本的なものと言える」。「『絶対的なもの』が相対的なものの一局面として捉えられると言えるのである」。この理解は、そこにある神と世界を包括的かつ全体的に捉えるときにいうことのできる状況理解、ないし作用動向のすべてを捉えて表現することのできる内容である⁽³⁸⁾。

このように、ここに示されているのは、作用全体が統合性の原点たる大いなる包摂としての神の結果的本性の現れであり、ここに人格と類比され、神の原初的本性が完結していく、すなわち「神の主体的指向の完結性」が「結果的本性の性格に帰趨」していく、ということに他ならない⁽³⁹⁾。

この人格とは「時間の契機」として捉えられる現実態である。しかし、「時間的現実態」自体ではなく、それが「生きて常在する事実へと変異されること」を意味している。そうして神の本性におけるそれと相関的な事実は、「一連の要素における生命のもっと完全な統一性」とされる。ここにおいて神における人格とされる包摂的統合体と時間的現実態としての人格を連続しながら包摂態として作用的状況的に内実区分をなし、それぞれの相互的關係性を踏まえて人格を捉えることが可能となる。時間的現実態としての人格は前述してきた現実的実在と表現される量子に還元できる、その人間としての一存立体を創り出す経験主体そのものとして理解可能である。それは一（いち）としての統合性へのプロセスをたどり、道程における他との相互的存立における統合を創造し、ここでは他への存在参与を経た総合化が成し遂げられていく。そのプロセスには、相互の客体化がなされていく流れもある。これは一としての存立体の終極において各様にあるというのがホワイトヘッドの主張であるが、一個人の領域設定の次元で考えると、その個人を含め社会的人格の生育という自らおよび他の存在を客体化することのできる主体という、一個人をその内在人格とも連続性を保ちながら、その存立を位置づけていくプロセスと理解していくことができる。そこに客体化される人格性とは、自我上の人格としてわれわれがこれまで捉えてきた人格に他ならない。

人格の客体化はプロセスのなかでなされ終極においてさらに全体性への歩みをたどりつつなされると考えるのが妥当である。われわれの言葉でいうと上記したように、この客体化が可能な領域は自我論上の領域における人間存在そのものであり、まさに経験の途上から経験の終極に至る存在性である。すなわちこうした経験主体としての人間存在、自我主体の領域における状況の推移に他ならない。ホワイトヘッドはアリストテレスの主体論に対し批判的であるが、これは、あくまでこの主体論を経験という自我領域において見た時の批判的理解であり、アリストテレスの論を主語となつて述語とならない主語＝主体という「機械論的自然観」の線上で把握した見解である。あるいはそれを自我主体に限ってみた場合の理解であるといわざるを得ない。われわれが別稿⁽⁴⁰⁾で見てきたように、アリストテレスの世界観は、場の理論、場の理解における実態の相補性、両極性を総体として理解できる論点をも内包する部分もあり、こうした側面をも包含した理解をするならば、

われわれはこれを決して機械論的自然観として退けることはできない、むしろ両極性の全体を包含する流れをさえずでその総合的な論のなかには内包しているとみることができる。しかし、上述したように個的存立体として人間を見るときには自我主体領域という限られた人間存在の物化的領域を取り上げている理解であることは否めない。

それでは、この存立体としての一へ向かう人を客体化する主体という存在は、時間の経緯のなかで過去を現在から客体化するという捉え方によって理解できるのみであろうか。それは一の終極を客体化するという主体的存在を位置づけると考えるのみではあまりにも単純化しすぎることにならないであろうか。そのプロセスを内部に分け入って熟考するときに、時間の経過のなかで絶えず客体化され続けて、一としての終極を迎えるという事実の集積、およびそれを経過していく流れのなかで、われわれは主体によって包摂されていくプロセスとその主体を意識するか否かに関わらず、経過をたどりゆく志向的動向、その存続自体のなかに包摂態へ流れ込むことのできる多様な統合性への道の複合的な存在を想定することができる。

それは包摂への道から外れる多くの筋道をも含みながらも、しかしそこに統合への包摂を指向する内実があってはじめて一としての存立を確実化することができる。なぜならそこには意味の継続があるからである。そこにはプロセスをたどることのできる、換言すると前進的継続・持続を維持できるかどうかという、すなわち、そうした前進的な価値基準に添うことができるかどうかという選別の作働がある。したがって、ホワイトヘッドの個的存立体、一としての存立体への道と、全体的総合的作用動態の論は、われわれの思考を志向性の存立と継続という、しかもその価値志向における様態の要として精神性の核になりうる軸芯を確実視することによって、志向性の永続的な道を明確化することができる。このことにより、単なる機械論的論理へと落ち込むことを救い、さらなる全体的総合的な作用動態として宇宙的世界への開きのもとで、一（いち）としての存立体的作用動態の継続を提示していく連続性を可能にする論が成立する⁽⁴¹⁾。

ここに働いているのが神の機能（作用）ないし原初的な本性から結果的な本性へと至る両極を貫徹し包摂する意図といえる内実なのであろう。このような作働の核としてホワイトヘッドは「愛」を指し示している。彼は、「キリスト教のガリラヤの起源」たる愛を語る。それは「統治する皇帝（シーザー）でも、呵責ない道徳家でも、不動の動者でもない、……愛によって働く優しい要素に依拠する」。そうした「愛は統治せず、不動でもない」⁽⁴²⁾。彼のいう愛とはキリストが説いたままの「愛」そのものである⁽⁴³⁾。これがホワイトヘッドの宗教論に関するわれわれなりの理解に基づく整理である。

彼の議論は、論理性の次元でみると、自我主体と人格主体として、二元的であるとしてしか理解されにくかった論を、愛という神の意図のもとに総合化することを可能にし、しかも自我と人格という両極的態様の作用動向をも示唆してくれる。人格論、特に自我的人格性と人格主体論における両極的存立状況の具体的相互性の可能性を押し開くものでもある。これは前述した位相的理解を通

じても解題することができる。再述になるので詳述はしないが、例えば紙の裏・表とは、裏と表という視点で見ると限りにおいては二元的であるが、それは一枚の紙であり全体としてみる限りにおいては両極を持ちながらも一体性を保持している。表と裏とは量子論を引き合いに出すまでもなく連続している、さらにまた周知のメビウスの輪においても一層明瞭にその連続的な様態をみることができる。

こうした考察により、宗教的次元をも包摂してプロセス哲学を理解していくときに、ホワイトヘッドの論がわれわれのいう人格論的考察に可能性のみならず堅固化をもたらす論となることを知ることができる。われわれは人間福祉学の要に人格論を置き「相互的人格主義」⁽⁴⁴⁾として別稿において福祉を総合的に論じた。人間福祉学はまさにこの章における論に明らかであるように、人格論を堅固化・確実化するプロセス哲学によって、その基軸的側面をさらに強化されることになるのである。

以上のようなプロセス哲学の考察をもとに、それを人間福祉学上の人格論と関連づけたこれまでの議論を集約することによって結びの章として次に記しておく。その集約の論において、相対主義と絶対ということについての和解的存立が可能となることをも前述の議論を纏める形で、明らかにしておきたい。この相対と絶対についての議論に解を与えることについては、この小論の範囲内では言い尽くせないが、ホワイトヘッドに即して論を重ねその機軸論を補足的に導入して、彼の「すべての関係性」という議論において、相対主義の貫徹であるかに見える論の進行のなかに、特にそのプロセス論にある志向性の論を用いて究明を進めるときに、われわれは絶対への希求という形で前方の価値を前提にして存在が確実化されてゆくことを知ることになる。それは、意識のなかに心を高度の意識状況として抱き持つことのできる人間存在における最高にして最大の発見であるといえることができる。その価値とは人間存在とその生きる世界を前提に考える限りにおいて、総括的表現を用いると福祉価値といえることができる。

結章 (人間) 福祉学のプロセス哲学的展開可能性

われわれがこれまでの著書等において取り上げてきたマックス・シェラーの人格論を、特に本稿では、ホワイトヘッドのプロセス哲学との連関性を追求しつつ理解を深めてきた。その考察により自我上の「人格」たる人格領域の高揚を目途とする条件整備によって、自我領域における物化的対象化状況から、人格主体という対象化・物象化から離脱した作用領域に向かい各様の作動が展開され、志向性のプロセスという動的営みが継続されていくことが一層明らかにされた。この議論は福祉論にとって大きな前進をもたらす。

現在に至るまで展開を遂げてきた広義の福祉領域ないし人間福祉領域の条件整備に関する多くの努力は、既述された人間の主体化へ向かう一（いち）としての存在動向を支えるべく曲折のもとに堅固化へ向かい現実に即して試行錯誤を辿りつつ改善展開されてきたといえる。これは人の潜在能

力ないし可能性に視点を当てた自我的人格構造・機能に対する各様の具体的施策、さらにそれを支えてゆく内的側面への寄り添いをはじめとした多様な支援的活動の展開、またその日常化の実践努力によって現実化されてきた。日本の現状を実例として取り上げても、困難な事態の継続はあるものの、今後ともその努力は強化されてゆくという期待を抱くことができる⁽⁴⁵⁾。人格主体への動態は人の意識状況に当初はランダムに、したがって部分的な形で包摂されてゆき、さらにその先端部分に集約される統合性への志向によって導かれて連鎖を形作ってゆく。そこにいう志向性とは、これまでのわれわれの考察に基づくと、具体としては前方にある統合作用の作動と連動しながら、両極性のもとに動的となる内なる作動そのものと位置づけることができる。その統合性のもとで人間存在が一となることによって、それに発した人格主体の存在が自我と人格性の連動および継続性を維持できる道を形成し、そのプロセスは統合性と密接に関わりその存立の要となる精神の結晶たる「愛」⁽⁴⁶⁾という人間存在における軸芯の作動によって上述の現実的な志向性への道が開かれる。その統合性への道にありその軸芯となる人間の意識の要にあたる部分としての愛の存立によって、人の存在における歩みを完遂していく条件となる可能性が強化されていく。このように見えてくると、ここにいう「統合性」とは「愛」を前提にする全体的結合への志向意識の道程に他ならない。そこでは、上にいう条件整備、即ち「人格主体が作動しうる条件整備」とその高揚ともいえる志向の方向ないし目的性がいつも問われていく。

さらに厳密にいうと、そこでは条件整備が福祉的統合性に向かうことができるかどうかという基準に添って、志向性内の価値意識とその具体的作動としての個々の内容が問われねばならない。その在り方次第で、自我上の人格から人格主体という人格の真の実態化へ至る道程が現実的かつ具体的に決定されることになる。そうしたプロセスの展開は、全体的態様としてみるときにホワイトヘッドのいう「現実的實在」が一（いち）へと向かい、その総合的な継続のもとに宇宙的な作用動態が理解されるという前述してきた考察についての人間の存在内における具体的な展開動向によって、またその深化の影響度合いに左右されることになる。その人格主体への道程は、統合性へ向かう作動要件成立についての意識に対する志向性の浸透度合いによって動向が定立されていく。

それは総体としてみるならば全体的動向という方向性を持った包み込み状況のみの説明に終わるかに見えるのであるが、さらに視野を広げ密度を高めて全体が内包する個々の動向について議論を展開していくことが可能である。

われわれが解明していこうとしてきたのは、上述した全体動向に内包されつつ、それをさらに内包するともいえる世界の相互包摂的なプロセスである。そこにおいては、両極性の片方に位置するミクロコスモスの世界から出発しながら、そのプロセスの内部において形をなして一（いち）としての個的存在における現実的實在を軸芯として捉え、全体動向たる価値状況へ向かおうとする動的かつ包括的な把握が課題とされた。この考察は、まさに福祉という次元において一（いち）人間存在の一としての存在性を生かしうる動向の基準価値の中心に置かれる人権重視ないし人間の存在価

値における平等論，すなわち個々の価値づけの平等の考え方と軌を一にするといえる。その一から全体への志向がなされていく在り方と福祉上の人間のニーズ充足という価値充足への道という二者の同一性態様は決して偶然的なものではない。存在の意味解明をなしていくその究極において一としての位置づけの極微において，それを現実的実在として存在展開の発端を見出すホワイトヘッドの位置づけの論は，福祉における一たる存在に価値をおきそこに全体性への志向を形作る発端を見出そうとする在り方とプロセスで捉える限りにおいて同一線上に在ることができる。そこには存在の断絶を越え出て統合性に向かおうとする本質的な志向動態の許容が作動している。それは破壊や断絶という在り方を前提とすることなく，創造の継続という価値基準を前提にする意味の内在とそれ故に行き着く態様である。それ故，そこにおける創造プロセスの前提価値の作動とそれに従うことによる一たる存在となるまでの個人的生の条件づけのもとにあって可能性を生かし続けるという福祉上の行為が，目的的に肯定され意味を熟成し続ける人間と人間社会の存在性として形作られていくことになる。こうして，個々人としての一たる存立と創造への参与が全体動向のすべての基礎となり，全体性を意味的に包摂する趨勢動向となっていく。

このように福祉上の志向性をたどるプロセスが，ホワイトヘッドのいう量子論に端を発して解き明かされてきた存在の極微から極大へ至る有機的全体のプロセス論と一致していく。

ところで，ホワイトヘッドに従い，人間存在の行為連鎖を，一たる個人の存立性と全体への被包摂によって存立を終えるまで生き続ける動向として捉えるときに，表面だけ追うと単なる無機的なプロセス論にしか見えない。しかしこのホワイトヘッドの論は，前述したように，存在の両極性の片方に精神性の軸芯を持つ論であり，その軸芯においては，そこにおける愛を核とする宗教性と合一化する胎動を内包するという堅固な側面を持っている。それは，福祉論ないし人間福祉論という志向性を内在させた永遠性への胎動論と密接不可分であり，それと連動する動的脈絡のなかに包摂されてあると理解することができる。

こうして福祉論という人間存在を極微の次元からさらに究極に至るまでの考察に照合すると，その作用動向を推し量ることのできる量子論的有機体のプロセスたる連続性の論がそこには存立しており，意識や意志的営みの創造性という生まれ出る営みの内在を経て，想定される極大との相互補完的な現実性に即した論としてその論旨を一貫させている。

それは次のようにも解題することができる。上記のような両極性を持つ存立態様は，ミクロコスモスとしての一たる存立が同時にマクロコスモスたる存立体に包摂されながらそれを包摂する相互性の関係を持つ作用存立性をもって成立していく。すなわちマクロコスモス的世界とミクロコスモスの世界の相補性として総括できる上述の内容は，マクロコスモスの世界がその説明概念としての完成度を高めうる議論でもある。両極は，プロセスとしての存続を前提にする限り，さらに志向的存続のなかで創造および創造的破壊をも包含させながら同一作用存立をなす⁽⁴⁷⁾。われわれはさら

に両極性の、マイクロコスモスについての存立基盤から解明を高度化させていくことができる。まさにそれは人格論という次元がここで最終確認される内容になる。そのためには、ホワイトヘッドのいう現実的實在がその量子的存在性を統合化させ、人格へと向かうプロセスをこれまでの説述の確実な再述と再確認をしていくことによってその考察内容をより明確にしてゆかねばならない。

量子的存立状況のなかに生じていく意識が経験を積み重ねていくプロセスを経て、何らかの目的性を持つ現実的實在という統合性の第一段階へ到ることは人格へのステップにおける初期状況のなかで見られることとして、これまでの説明によって了解されたことであろう。この意識のステップは経験との相補性のなかに高揚があるものの初期的にはやはり経験によって主導され意識の明度が高められ、内実においても高度化していくという見方が妥当性を持つであろう。さらに繰り返される経験によって意識の高次化が進み、それがさらに繰り返され経験の土台ともなる。そのような経緯のなかで諸種の行為に次第に一定の段階状況が与えられていくというプロセスが容易に想念される。こうして人格への条件となる諸事が整えられ、初期的段階の人類における二足歩行、脳の発達等といった身体的条件との相補性によって、意識と経験との相補性は目的性による行為といういわゆる人間的段階へと到達していくことになる。

こうしたマイクロコスモス的な次元における高度化は、マクロコスモスとの間の相補性の広がりの中に意識と経験の相補的な態様動向を形作っていくことになる。しかし、初期においてはマクロコスモス世界の大部分が神話的に捉えられるのみであり、宗教という、しかも原始宗教段階という長い期間を経て、科学の手に委ねることのできる領域の拡大が生じ、次第に科学的説明と方途に諸行動が依拠できるようになっていく。しかし、この段階への移行はいまだ進行中であり、ともすれば科学と宗教の相補性という在り方が、「唯物的世界観、機械論的自然観」に圧倒されてしまい全体的動態を見失うという事態に陥ることにもなる。ホワイトヘッドの哲学は、この事態に明確な現代的具體における警鐘を鳴らしてくれる。この警鐘は、現代におけるありとあらゆる学問領域、科学、自然科学のみならず社会科学に対しても、さらに、現実の諸施策領域、技術領域においても受け止めるべき内容を堅持している。この小論においては、個人的存在に視点を置き、その存在から出発して意味ないし価値を探っていくとする極めてミクロな視座を必須とする人間福祉ないし福祉領域において、特にその個人の中核である人格に視点を当てて考察を加えてきた。その人格が上述の大局的プロセス動向の人間存立における基軸である。

さて、この人格において、現実的實在は、まず自我論上の科学的自然観に基づいて理解される。それは現実的具体的に福祉という目的性を持って、人の生活問題状況に発し、その人としての生の構築を図り、一（いち）としての存在を形作るプロセスにおいて、その人の存在性を個性的生存への道にあるとして捉えることが行為の前提とされる。しかし、この人格とは、あくまで一へのプロセスにあるのみであり、その一としての存立途上のものでしかない。それは主体ではなく、いまだ客体でしかない。この意味での客体は、ホワイトヘッドのいう流動的客体とは異なっている。ホワ

イトヘッドは、この自我論上の存立体をプロセス論的に、把握することの困難な作用的存在としてみている。したがって、作用としての部分的客体化があるのみと捉えている。これが一となって、次の存立体に受け継がれるときに一として客体化（実体化の完遂）がなされるとみるのである。われわれはこのプロセスをより厳密に理解するためにシェーラー流の表現を用い自我的人格と人格主体の論に依拠することによって解明理解することを試みたのである。自我上の存立体は心理学的人格を含み客体化しうる領域といえる。その領域存在は真の主体へ到る前段階、あるいは主体を部分的に含むという未開発段階の人格である。

そこでマイクロコスモス内にあるこの段階の存立体は、人格へ到る数多の条件を必要とする。これが広義から狭義に至る福祉施策や支援の技術による個への働きかけ、あるいは自ら作りあげる行為・用役に集約される。この土台のもとに人がその個的存在を維持・発揚し、生きる条件が形成される。そのなかで一たる現実的实在への道をたどることが期待される。このプロセスは、あくまで道程そのものであり、独立し完結した内容として把握されるものではないことがここで想起されねばならない。それはあくまで目途への条件内容を構成するものでしかない。現実的实在の一としての位置づけへの途上を支えるのみである。その土台の上で各時点において、土台に支えられつつ主体への道が用意されていく。これが真にその道であるかどうかは確実に然りということとはできない。そこには真を探るための試行の連続があるのみである。しかし、それでもその連続が主体へ、特に一たる人格主体へと続くことになることを総体としてみるときに、そこに同時的にある両極性の相互存立故に想定することができる。その人格主体はそこに在るべくしてありながら見て把握することはできない。われわれは、個の連続性のなかに、単に志向性を見出すことができるのみであると、かつての考察のなかで述べてきた⁽⁴⁸⁾。換言すればその志向性のなかに既に人格主体が内在していると捉えることができるが、そうした捉え方が想念されるのみであるという他ない。まさにその議論がわれわれのいわんとする内容を補足し、内なる充足へと導いてくれる。

前方志向的、かつ継続への目途と、それが福祉という個的な生存状況の向上、個の本質プロセスへのリカバー（帰還）といった目途に接続することへの絶え間ない努力という行為を内在させながら行為の継続がなされていく。こうしたいまだ二元性を持つかに見える論が、上記して理解してきたように、その全体的マクロコスモス的論、すなわち相補性のもう片方が明らかにされることによって、相互的に内包される両極性のなかで有機的全体性として一元性を保ちつつ、動的状況の全体がそのミクロ的内実を包含して明らかにされていく。それが現実的实在という限定されつつ限定する、包含しつつ包含されるという存立体そのものの姿である⁽⁴⁹⁾。

この両極的存立体、これがより人間に即して理解されるときに軸芯としての統合的人格主体とされる存在がその存立を見えない存在を含む全体たる人格主体としてわれわれに明確さをもって想念される。これは自我主体から秘奥人格にまで至る道筋において両極性を持ちながら一貫性を持つ。

最後に残されるのは、目途や価値意識、高揚への期待感、これを位置づける宇宙的土台を問う作

業である。ここから宗教的次元の考察、目に映じないがしかし存在する世界の次元の实在が明示されていくことになる。前章の終わりに述べたこの次元は、換言すると、統一への信仰、宇宙的統合作用の究極、有機的宇宙の世界と極微の世界が相互に両極的に確実に存在しつつ極微から極大へとたどりゆく、またその流れの軸芯と流れの作用性として個々に新たな宗教性を持って語られることになる。いうなれば新たな宗教が始まっていくことになる。

ホワイトヘッドは、宗教とは、「内面を浄化する信仰の力である」⁽⁵⁰⁾という。そうして徹底して真剣に信仰的であることを求める。それによってそこに形作られる「内的事実」をもとにする「内的生活」が「現実存在の自己実現」となって表現されていく。さらに次のようにいう。「宗教は人間そのものと、また事物の本性の永遠的なものとに依存するかぎり、人間の内的生活の技術であり理論である」⁽⁵¹⁾と。さらに次のようにもいう「信仰と合理化が十分に確立されて後、はじめて孤独性が宗教的重要性の中心をなすものとして認められる」⁽⁵²⁾。ここにいうホワイトヘッドの宗教観は、彼のプロセス哲学の内実と一貫している。すなわち、一たる現実的实在への道を自己実現の道程としてたどりゆくひとりの孤独者の歩みを示唆する内容となっている。それは信仰に、それも徹底した信仰に支えられることによって両極性の同時的合理的存在となって有機性のもとに在る、ないし現実となる、という存立の姿をわれわれに伝えてくれる。

徹底した一たる孤独者・個の連続性のなかに人間存在の側からの究極が捉えられる。

ホワイトヘッドの論点を課題として取り上げたわれわれの視点からすると、キリストが語り聞かせ、それが時代を超えて伝えられてきた究極の愛へ向う孤独者の信仰の姿が、彼の哲学と宗教観の中心となっていることに注視せざるを得ない⁽⁵³⁾。

ここにいうキリスト教的確信とは、自らの自我的存立における個我への執着から自由になるという信仰的立場のなかに表現されているということが出来る。誤解を恐れることなくいうと、それは利己的世界から離脱し「愛」としての存立の本質によって他へ存在参与をなす生の在り方のなかに見出すことができるという確信である。われわれの言葉で再述すると、個我および他我の背後にそれを統括する人格性を求め人間の存在価値に視点を置きそれを根底から価値づけていこうとする信仰の実践的な姿である。この道程は磨かれてゆく愛の高度化のなかで存立し継続への道をたどることができる。このようなプロセスにおいて真の愛への道がさらに存立してゆくことが許される。こうした人格ないし人格主体は、究極の人格性への道たるシェーラーのいう秘奥人格という人格性にある愛の結晶であり、そこに主体ないし一としての個人のなし得る限りの行為の結実がある。その連続のなかで、人間の福祉の営みは、人全ての個的、さらにいうなれば個性的存立を輝かすという福祉の究極目標としての愛としてさらなる高みへと歩み続けられる。そこに「統合的人格の確立(嶋田啓一郎)」へのプロセスがたどられてゆく⁽⁵⁴⁾われわれは、ホワイトヘッドがいうように「生の単なる事実を越えたところに横たわっている生の一貫性があることを認識すべきである」。宗教とは「このように現に把握されている事実を越えたところに現実的でかつ推移的なものの機能がなお残

存しているということ、この直接的理解である」⁽⁵⁵⁾。自己と他者の人格性を高揚の道筋をたどりつつ求めてゆく旅路は、把握された事実を越えながら歩む志向性のなかにある。前章の末尾に述べたように、ホワイトヘッドの全ての関係性という相対主義の貫徹の論とさえ思える議論のなかに、その論理プロセスのなかにおいて上述のような志向性の論を探り出してゆくときに、われわれは絶対への希求という形で前方の価値を前提にしてはじめて存在が許され、確実化されてゆくことを知ることになる。そこには、人間は意識のなかに心を高度の意識状況として抱き持つことができる、という人間存在における最高にして最大の発見がある。そこにある価値とは総括すると福祉価値といえることができる。それは、人間存在が永続という課題を保持しそれをたどり続ける限りにおいて、在ることを前提にして存在性が確実に許容されてゆく現実的実在の核心である作用上の意味であるといえることができる。こうして人間存在は、福祉的存立への志向を持って存在が許され確実化され宇宙的存在の全体的統合化への完遂を志向してゆく永遠の旅路のなかに在ることができる。その作用をさらに具体化するというならば、相対主義的存在のすべてを導く価値の原点であり、さらに具体化すれば存在の一たる存立に意味を与え相互存立の意味の開花を可能とする「愛」に他ならない。それはあくまでも前述した意味におけるキリスト教的愛である。相対主義の渦巻くなかにおける志向の本質軸であり、神の「結果的本性」であるということもできる。この志向に基づく人類の旅路は、現実的実在という一に向かい客体化を経ながら継続し続ける。そこにある志向性とは愛という軸芯に支えられた一たる存在の一たる存立を支える条件設定によって可能になっていく。この条件設定の中心に在るのが人間の存立を現実のなかで支える人間福祉施策、活動、技術であり、これを継続させ一たる存立への志向性を前方志向的に統合力のもとに包摂してくれるのが人間福祉という存在価値の開花を可能にする理念軸に他ならない。愛という軸芯が、この理念軸、さらにはその作用たる統合軸を作動させる要にある。その意味で、相対的存立が絶対を包摂し、しかしその相対主義は愛という志向軸によって包摂されその浸透の深化によって存立が可能になるという形で抱握のなかに在ることが許されてゆく。こうして絶対は状況に包摂されさらに絶対が全体としての状況を抱握し永続へのプロセスがたどられるのである。

注

- (1) 志向性については、メルロ＝ポンティの用法に添い intension のニュアンスで用いている。ホワイトヘッドは、aim を用いて、現在、指向性という訳語が用いられることが多いが、本稿ではわれわれによるこれまでの諸稿との統合性を保つべく、意志的目的性への方向性の内包という意味のニュアンスを重視して志向性 (intension) という表現を用いている。
- (2) 牛津信忠「自我論と人格主体論の現象学的再考」聖学院大学論叢第27号、第Ⅲ部1の94-95頁。
- (3) Whitehead, A. N., "Process and Reality, 1927-28". Cambridge edition 1929, 山本誠作訳「過程と実在(下)」, (著作集11), 松籟社, 1984年, 434-435頁。
- (4) 上掲聖学院大学論叢27号内拙稿Ⅲ(1), 95頁。特に上述の位相論の連続性に関する内容は、91-96頁に詳述している。
- (5) Jeremy Butterfield & Constantine Pagonis, "From Physics To Philosophy", Cambridge, 1999.

pp. 214-215.

- (6) 上掲訳書, 「過程と実在」 510-511 頁。
- (7) Bohm, David, “Wholeness and The Implicate Order”, 井上忠, 伊藤笏康, 佐藤正博訳「全体性と内蔵秩序」青土社, 1986 年, 147 頁。
- (8) 「過程と実在 (上)」, (著作集 10), 292-295 頁。
- (9) 同書 296-298 頁。
- (10) 同書 308-309 頁。
- (11) Kraus, Elizabeth M. “The Metaphysics of Experience, A companion to Whitehead’s Process and Reality.” Fordham University Press, 1979.
- (12) ibid., Figure3. p. 71.
- (13) 上掲「過程と実在 (下)」 509-510 頁。
- (14) 同書, 520 頁。
- (15) 同書, 521 頁。
- (16) 同書, 526 頁。
- (17) 山本誠作著「ホワイトヘッドと西田哲学」, 行路社, 1985 年, 157 頁。
- (18) Whitehead, A. N., “Religion in the making”, Cambridge. 斎藤繁雄訳「宗教とその形成」(著作集 7) 松籟社, 2007 年, 6 頁。
- (19) 同書, 16 頁。
- (20) 前掲書「ホワイトヘッドと西田哲学」 146-147 頁。
- (21) 上掲書, 148-149 頁。
- (22) 同書 150 頁。および山本誠作著「ホワイトヘッド『過程と実在』」晃洋社, 2011 年, 77 頁。
- (23) 同書 151 頁。
- (24) 同書 152 頁。
- (25) 前掲, 斎藤繁雄訳「宗教とその形成」, および, 前掲, 山本誠作訳「過程と実在 (下)」における宗教論を参照。
- (26) 前掲書「過程と実在 (下)」 624 頁。
- (27) 同書 615 頁。
- (28) 同書 624 頁。
- (29) 同書 615 頁。
- (30) 同書 614-615 頁。
- (31) 同書 625 頁。
- (32) 同書 510 頁。
- (33) ここで機能という表現も用いられるが, われわれはこれを, 「作用」と置き換えて理解する。機能はそこにそれをまさに作動させる構造を用件としており, ある意味での構造的固定をもって支えられる側面を有している。しかしホワイトヘッドの真意をたどっていくと, その固定した用件を前提とすることのないあくまで機能の持つ前に進んでいく動的作動たる作用力をそこに捉えることができれば十分であると考えることができる。したがってわれわれはホワイトヘッドの機能という表現のうちの構造的外形をのぞく作用のみをここでは機能という表現の核として理解し, その見えざる力を捉えて表現しておく。以後機能とする場合においてはこのような理解を前提とする。
- (34) 上掲同書, 93-95 頁。
- (35) 同書 59 頁。
- (36) 同書 93 頁。
- (37) Hartshorne, Charles, “Whitehead’s Philosophy, Selected Essays 1985-1970”, University of Nebraska Press 1972, 松延慶二・大塚稔訳「ホワイトヘッドの哲学—創造性との出会い」行路社, 1989 年, 260 頁。

- (38) 同書 169 頁。
- (39) 前掲, ホワイトヘッド「過程と實在(下)」, 616 頁。
- (40) 牛津信忠「社会福祉における場の究明」—共感共同からトポスへ至る現象学的考察—2012 年, 丸善プラネット, 特に第 15 章, 相互主体的「生」: 包み込み合う存在性, を参照されたい。
- (41) ホワイトヘッドはその宗教論のなかで次のようにいう「生の単なる事実をこえたところに横たわっている生の一性質がある。」「われわれがこれを事実の中に包含したとしても, なおも性質の性質が除外されたものとしてある。」これを前提として宗教を位置づけていう「宗教とは, このように現に把握されている事実を越えたところに現実的であつ推移的なものの機能がなお存在しているということ, この直接的な理解である。」著作集 7, 「宗教とその形成」46 頁。
- (42) 前掲「過程と實在(下)」611 頁。
- (43) ホワイトヘッドのいうキリスト教の神髄とは, 「初期キリスト教の真相」を示す「キリストの語録」そのもののなかにある「内在性」の主張である。それは「パウロよりもヨハネ伝」のなかにあるとする。著作集 7, 42 頁。
- (44) 前掲, 牛津信忠著「社会福祉における相互的人格主義」I。特に第二章。
- (45) わが国における「社会福祉基礎構造改革」から「社会福祉法」への歩み。および障害者に対する「差別解消法」の実施等。さらにバリアフリーやユニバーサルデザインの広がり, 人に対する支援におけるリカバー概念に関する方法論上の模索の深化等を想起されたい。
- (46) 本文にも示唆しているが, ホワイトヘッドの宗教認識にいう「愛」について彼の言説のまま記しておく, それは, 「皇帝のイメージ」, 「道徳的エネルギーの擬人化のイメージ」, 「究極的な哲学的原理のイメージ」のいずれにも偏することのない「キリスト教のガリラヤの起源」に依拠するとされている。その愛とは, 「統治せず, 不動でもない」とされる。前掲「過程と實在(下)」610-611 頁。
- (47) 前掲書「ホワイトヘッドと西田哲学」16 頁。および岸根卓郎著「見えない世界を科学する」彩流社, 2011 年, 第 IV 部量子論の世界, 122-126 頁, 135-136 頁。ここに平易に説かれている内容においては, 古典物理学の世界, いわば理性による判断に基準を置く「機械論的科学主義」と「直観主義の科学」といえる量子論に軸を置く論を対比し後者が採用される。ホワイトヘッドは, この「直感主義」という特性による量子論上の議論の底流に流れる両極軸を持った世界状況を位置づけている。その言説は, 宗教の科学的解明たる内容といえるものとしても展開されている。すなわち宗教に量子論を用いた解明を試みている。
- (48) 前掲, 牛津信忠「社会福祉における場の究明」24 頁。
- (49) 同書, 第 15 章における「包み込み合う存在性」についての記述参照。
- (50) 前掲書, 「宗教とその形成」5 頁。
- (51) 上掲同書, 6 頁。
- (52) 同書, 8 頁。
- (53) 同書, 41-42 頁。
- (54) 人格主体の論についてはシェーラー等に依拠した。前掲「社会福祉における場の究明」29-33 頁参照。こうした人格に関する考察は, 権威や力の原点としての神ではなく, 人間の内在性の原点に愛の必然を見出し, そこへ至るプロセスへと誘う神を指し示すホワイトヘッドの宗教観と密接に関わる。われわれはここにホワイトヘッドが指し示す内在性の歩みゆくプロセスに人格性ないし人格主体をおいて論じている。「統合的人格の確立」というこの目途は, かつて嶋田啓一郎によって最終的に社会福祉が目指すべき方向性として述べられた(嶋田啓一郎著「社会福祉体系論」ミネルヴァ, 1980)。
- (55) 前掲「宗教とその形成」46 頁。

Meaning and Possibility of “Process Philosophy” in Human Welfare Theory, Part III : Studying Core Logic in Methodological Meaning and the Possibility for Development in Welfare Theory

Nobutada USHIZU

Abstract

Scientific intention based on quantum theory can avoid falling into mere mechanistic logic by positioning intentionality in the pillar of spiritualism and on the core of logic. Furthermore, we examine certain workings that enable the continuation of integration into one existence by opening to the world with overall synthetic dynamic operation. Paying attention to the corresponding characteristic of existence as one person in such continuous working, we perceive and act on it as the working of personal welfare. As mental content in the core of such operation, Whitehead points to the love preached by Christ. An upsurge of love is understood in the form of steps in intentionality exceeding the grasped fact, and love becomes possible through conditions of establishing support for the existence itself of one person. Those conditions are human welfare policy, activity, technology, etc. Process philosophy provides significance to such a development of welfare through synthesis.

Key words: actual entity, bipolarity, compatibility, topological theory, process philosophy